戦後アメリカに移住した日本人女性の「エスニック資本」の活用

―サンフランシスコ・ベイエリアに移住した女性たちの事例から―

武蔵大学　中西祐子

１．目的

本研究は戦後の日本社会からアメリカへ移住した女性たちがどのように「エスニック資本」を活用し、現地の社会に定着していったのかを明らかにする。本論における「エスニック資本」とはブルデューが概念化したところの経済資本、文化資本、社会関係資本などから構成され「日本人であること」「日本語能力」「日本人ハビトゥス」「日系ネットワーク」といったものを指す。エスニック・マイノリティにとって「エスニック資本」が重要であることは、先行研究においても指摘されている（樋口 2012 など）が、日本人女性の移住はその多くが単身によるものであり、柳（2013）の指摘同様、移住日本人女性もその多くは同胞家族のような強い紐帯を持っているわけではない。また既に現地に構築されたホモソーシャルなエスニック経済資本へのアクセス機会も限られていると考えられる。

２．方法

本報告で分析するデータは発表者が 2011 年 10 月～2012 年 3 月、2013 年８～９月、2014 年３月にサンフランシスコ・ベイエリアで行ったアメリカ移住日本人女性 17 名への半構造化インタビューによって得たものである。対象者の年齢は調査当時 30～70 歳代、渡米時期は 1950～2000 年代、平均滞在年数は 22.9 年であった。当時の在米ステータスは市民権保持者３名、申請中 1 名、永住権保持者 13 名である。渡米のきっかけは「勉学」の者が 10 名、「結婚など」が 7 名であった。対象者のうち婚姻経験があるものは 16 名に上り、うち 14 名は日本国籍以外の男性と結婚している。

３．結果

最も典型的なエスニック資本の活用は、仕事を探す際に見られた。文化資本の側面においては①日本語能力（日本語教師、翻訳、日系企業補助）や②日本文化の知識（日本食や伝統工芸品への知識）を持つことが、それらに関連する職を得る際に極めて有効となっていた。また③「日本人ハビトゥス」への期待がアメリカ人雇用主や顧客の信頼を得やすいと語る者もいた。これらの職業を得る際には④現地で知り合った日本人やアメリカ人が橋渡しとなったケースが少なくなく、現地で形成した弱い紐帯としての社会関係資本も重要であった。この他にも⑤老後や幼児のケアのための互助的ネットワークを構築する際にも、社会関係資本の利用がみられた。

４．結論

移住先で生きぬくためには、まずもって生活費を稼ぐ必要がある。既婚者であっても離婚リスクの高いアメリカ社会において、血縁親族のいない移住女性たちが第一に重要視することは仕事を得ることである。その際、彼女たちが活用するエスニック資本は、グローバル社会における日本経済の動向にも影響されており、移住時期によって変化も見られた。従来、移住に伴いエスニック・マイノリティとなることは、個人の持つ人的資本にマイナス効果を持つことが指摘されてきたが、アメリカ社会では雇用時に年齢や性別が問われないことや、コミュニティカレッジでの教育機会が移住者にも開かれていることが、移住日本人女性の人的資本の活用機会をむしろ高めている側面がみられた。

※本研究は科学研究費補助金（研究課題番号：24530662）の助成を受けている。